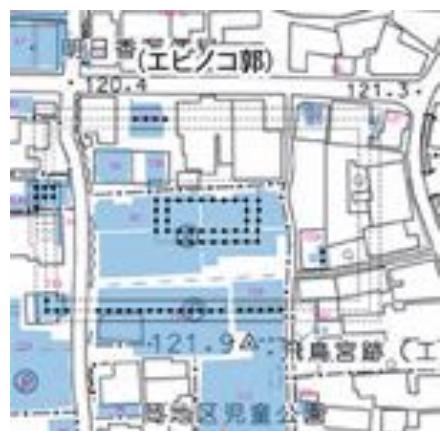
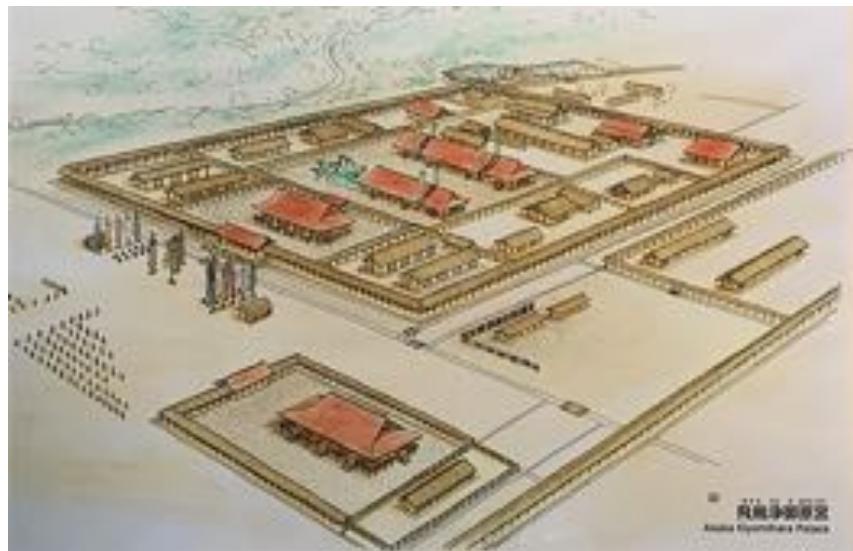


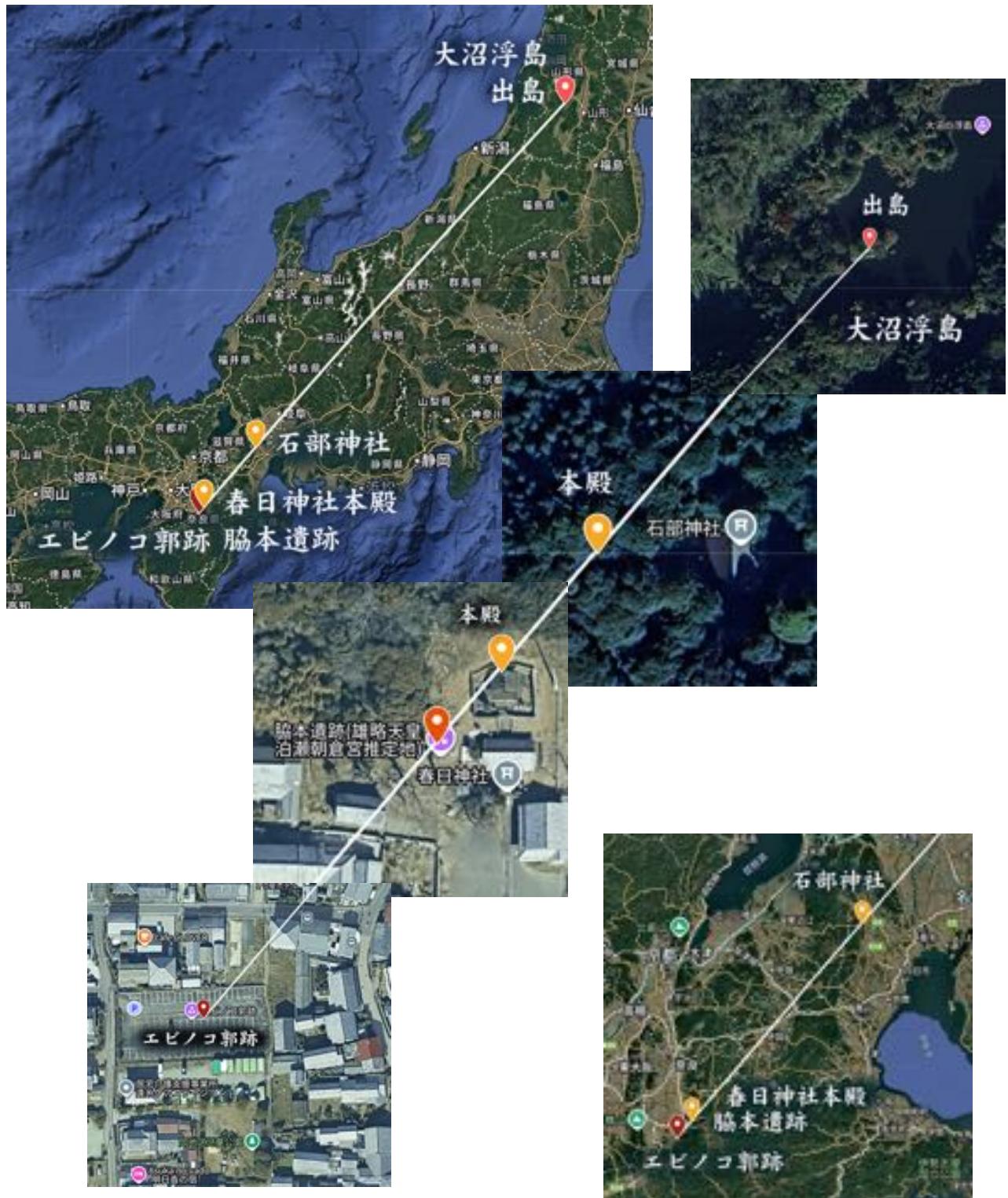
飛鳥淨御原宮（672～694年）

●いよいよ壬申の乱で弘文天皇（大友皇子）を滅ぼした天武天皇（大海人皇子）の飛鳥淨御原宮が気になった。白鵬文化の時代であり、八色の姓で氏姓制度を再編し、飛鳥淨御原令の制定、新しい都（藤原京）の造営、古事記と日本書紀の編纂を命じ、「天皇」を称号とし、「日本」を国号とした。初めての陰陽寮と占星台を設置したのも大変興味深い。

●役の小角の動きが気になる。672年の壬申の乱において役の小角は吉野勢を率いて大海人皇子に加勢し勝利をもたらしている。私が長年書き加えてきた歴史年表には、その前年の白鵬元年 671年に山形に来たと書いてある（出辞不明）。はたして何をしに来たのか？そして白鵬8年（679）に朝日岳を、翌年には大沼浮島を開いた。飛鳥淨御原宮遷都の7～8年後に朝日岳・大沼を開いたので、祭祀線はまだ繋がっていないのではないか？

●飛鳥淨御原宮の大極殿とされる「エビノコ郭跡」がどこにあるか調べてみると、飛鳥村役場のすぐ近くだった。はたして、山形と祭祀線はつながっているのか…





■エビノコ郭跡 → 脇本遺跡(雄略天皇泊瀬朝倉宮推定地) → 春日神社本殿 → 石部神社本殿 →
→ 大沼浮島 出島

■飛鳥淨御原宮エビノコ郭跡（大極殿）

「エビノコ郭」は、小字「エビノコ」にあることに由来している。この一郭には、 29.2×15.3 メートルで四面庇付きの大型の掘立柱建物が検出されている。これが通称「エビノコ大殿」であり、後世の大極殿の原型との見解が多い。しかし、飛鳥淨御原宮の大極殿では特別な国家的儀式が開催された記録が無く、大極殿は飛鳥淨御原宮の時代では存在せず、藤原宮になり成立したとする意見もある。

大殿の周辺は南北 100 メートル以上、東西約 100 メートルの掘立柱の塀で囲まれている。外郭の外側からは「辛巳年」（かのとみ）「大津皇子」「大来」等と書かれた墨書木簡が出土している。「辛巳年」は 681 年、「大来」は大津皇子の姉の大来（伯）皇女の名と推定できること等から、この最上層の遺構は天武天皇の飛鳥淨御原宮にともなうものであると考えられる。

すなわち、天皇の居住空間に相当する区画は東西 158 メートル、南北 197 メートルの後期岡本宮をそのまま使用したものであり、その南東の東西 94 メートル、南北 55 メートルの区域は儀礼空間として用いられ、そこに「エビノコ郭」が新たに設けられた。さらにこれら宮殿周囲を役所や庭園などの関連施設が取り囲み、役所の一部は周辺地域へも広がるという構造が周辺の状況や文献から推定されている。

奈良県高市郡明日香村岡 18-6

■脇本遺跡（雄略天皇泊瀬朝倉宮推定地）

脇本遺跡は奈良盆地の東南部に位置し、三輪山と外鎌山（忍坂山）に挟まれた、泊瀬谷の入り口にあたる場所にあります。春日神社のあたりはその中枢部があり東西約 300m、南北約 250m の範囲に遺構が散在していた可能性が指摘されています。飛鳥に宮が移るまで三輪山の西南麓から香具山あたり一帯は、大王（天皇）や皇后の宮が 13 もあったと伝えられ、大和王権の中心地域でした。

しかし伝承地は、ほとんど調査されることなく今日に至っていますが、脇本遺跡に限っては過去 18 次にわたる調査が樋原考古学研究所と桜井市教育委員会によって行われ、5 世紀後半、6 世紀後半、7 世紀後半の大型建物跡などが発見され、5 世紀後半の遺構は雄略天皇の泊瀬朝倉宮（はつせあさくらのみや）跡と推定され発見された南北方向の掘立柱建物 2 棟は脇殿で正殿は春日神社西側の集落内にあったのではないかと考えられています。（雄略天皇は万葉集卷 1 の巻頭歌でも知られる第 21 代の天皇で、当時は大王と呼ばれていました）

奈良県桜井市脇本

■春日神社

春日神社は、古代の「脇本遺跡」の中枢に位置する。この遺跡は奈良盆地の東南部、三輪山と外鎌山（忍坂山）に挟まれた泊瀬谷の入口にあたる場所にあり、古代の大和王権の中心地であった。

拝殿の裏には板塀に囲われた本殿が鎮座しています。

本殿は梁間 3 間・桁行 2 間、三間社春日造、向拝 1 間、檜皮葺。

棟木の銘より 1603 年（慶長八年）の建立とのこと（桜井市教育委員会の案内板より）。県指定文化財。

祭神はタケミカヅチ、天児屋根命などの春日神と思われます。

奈良県桜井市脇本 355

■石部神社

延喜式神名帳 石部神社 二座の論社

祭神/天日方奇日方命

[合祀] 大国主命 天児屋根命 誉田別命 大山津見命 市杵島姫命 火産靈神

*社頭案内は天日方奇日方命と大物主命としている

鈴鹿山脈の「竜ヶ岳」(標高 1099m)の東側麓の丘陵地、深い樹叢に包まれ鎮座する社。ご本殿は鈴鹿山脈を背にして建っています。創建由緒等は伝わっていないようです。ご祭神は天日方奇日方命。全国に点在する石部神社或いは石邊神社で祀られています(さらに遠祖を祀る社もあり)。それらの多くは石辺公氏が奉斎したとされる社。式内社も多く謎を深めている要因の一つに。磯部(磯辺)からの転訛、或いは磐座信仰(もしくは石神信仰か)に端を発する氏族なのか、想像ははたらくものの、如何せん不明氏族。

※サイトかむながらの道 ～天地悠久～様より抜粋

『文政一〇年（一八二七）の桑名領郷村案内帳』に、「鎮守 八幡宮、春日大明神、山王権現、弁財天、山神四社」とある。『員弁雑誌』には、「石部神社 今山王権現とも云、神殿東向拝殿在、山王宮の金字額在、前に小川在、北より南に流る、石橋を架す、鳥居在、石部神社の額在、社地広大神木長茂して神さびたり、延喜式朝明郡二四座の内に石部神社二座とある是なり、御神体は石三箇、中なるは大にして左右は小なりと云、『式社神躰考』曰、石部神社二座、祭神事代主命の子天日方奇日方命と石邊公二座也云々。

『式社名地考』曰、石部神社、天日方奇日方命石塊に在と云々。『勢陽雜記拾遺』に曰、石部神社二座、石邊公之遠祖也云々と。『布留屋草紙』曰、祭神天日鷦命也云々と。春日社 字潤と云所に在、一村の総社也、本社拝殿共に東向、石の鳥居在、例祭九月九日、俗惣産と云、又里俗伝に云、当社の神往古丹生川上新莊へ移り玉うと、文政八年（一八二五）酉一一月石榑郷新溜墨引絵図に此社石部神社と在。ハ幡宮村の東田の中に在、本社南向。山神社 村の内東北字出口と云う所に在、社頭東向、但地蔵相社。山神社村の西南林中に在、神石東向大石也。弁財天社 村の中に在」とある。『員弁郡郷土資料』には、「式内石部神社大字石榑南間の谷にあり、延喜式内にして天日方奇日方命、大物主神、天兒屋根命、譽田別命、大山津見命、市杵島姫命、火産靈神を祭神とす。創立の年月は詳ならざれども、当神社はもと、二社並座（旧俗称石大神宮、山王権現といいしならん）せしを、中古（永禄の頃ならんか）合せ祀り、石部神社と正称せしものならん云々」とある。

※三重県神社庁サイトより抜粋

三重県いなべ市大安町石榑南 2017

■大沼浮島（役の小角・弁財天）

湖畔にある大沼浮嶋稻荷神社（祭神/宇迦之御魂神）の神池とされ狐の形をしている。沼には大小の葦の島が風や流れに關係なく浮遊し、江戸時代には國の数 32 あり、その動きで吉凶を占っていたとされる。沼は白竜湖とも呼ばれ弁財天が祀られている。大円寺『朝日獄縁起』（1505 年）によると、朝日岳の麓に御手洗の「大富沼」があると記されている。

白鳳 9 年（681）役の小角が弟子の覚道を連れて出羽路に来た折、大谷川（朝日町大谷）のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり、60 余りの島が浮遊する神池大沼を見つけた。湖畔に浮島稻荷大明神を祀り、弟子覚道を別当（大行院）とし朝日岳修験が行われた。739 年には行基が

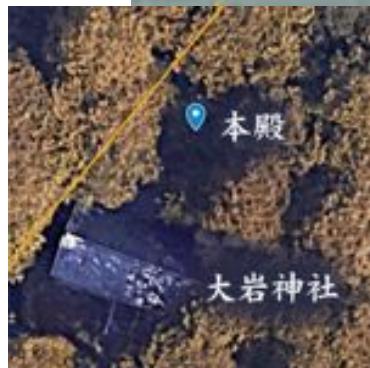
訪れ浮島 66 個に国の名前を付けた。建久 4 年（1193）には寒河江荘地頭となった大江広元の進言により源頼朝の祈願所になり、その後も大江家、徳川家、最上家にも祈願所として崇敬された。国指定名勝。
山形県西村山郡朝日町大沼

備考/浮島は、現在は数も減り、岸に付き動かないことが多いが、動く時は流れや風に関係なく意志があるかのように動き回り驚く。出雲族東王家の富家の人々は出雲から大和の葛城山東側に移り住んだとされる。役の小角の生誕地は奈良県御所市茅原。まさに葛木山の東に位置する。大沼を「大富沼」、大朝日岳の神を「大富權現（弁財天）」と名付けたのも役の小角だろう。役の小角が天孫族秦氏の稻荷神を祀ることはありえない。なにより伏見稻荷よりも古い歴史になってしまう。730 年に「大沼社を南西の丘に移す」記述があるので、その時に秦族がやってきて主祭神を弁財天（瀬織津姫）から稻荷神に変えたのだと思われる。徐福が連れてきた海童たち秦族は蓬萊島信仰を持つ。自由に動き回る浮島は相當に魅力的だったはず。古い祭祀線はほとんどが稻荷神社ではなく大沼の鳥居の立つ「出島（弁天島）」（写真）が起点となっている。



●祭祀線はつながっていた。しかも雄略天皇の泊瀬朝倉宮跡推定地と、隣接する春日神社本宮、さらには延喜式論社の石部神社。雄略天皇は即位のために兄弟や従兄弟たちを次々と殺戮した冷酷な天皇。鬼門に置くのは、的を得ているのかもしれない。それに、中国の『宋書』などに記される、讚・珍・濟・興・武という五世紀の倭国王「倭の五王」。その一人・武は、雄略天皇らしい。
ただ春日神社は、天武天皇が滅ぼした天智天皇の側近中臣家の祖神。藤原家が頭角を表し始めるのは次の持統天皇のあたりだから、この祭祀線に乗っかってくるのは少し不思議だ。淨御原宮がなくなつても石部神社により祭祀線は生きているので後に建立されたのかもしれない。

●次に大朝日岳とつないでみた。



■大岩神社 → エビノコ郭跡 → 上宮寺跡 → 大朝日岳

■大岩神社

祭神/天羽槌稚命(八大龍王)、応神天皇

開発されたゴルフ場コースのさらに奥、大岩集落がある山の頂に鎮座する社。手前には神宮寺と思われる大日堂があります。

◎当社を探るに三つの視点があるかと思います。まず一つ目は地名にもなっている「大岩」。上古からの巨石磐座信仰があったのかもしれません。近くに古墳が点在し、その石室の磐を「大岩」としたという説もあります。

◎二つ目は「天羽槌稚神(倭文神)」が祀られていること。東に2kmほどの大淀町芦原に姫神社が座し、棚機神の神格を有するとされることも多い下照姫が祀られています。さらに南東1kmの畠屋(機、幡、秦との関連の可能性あり)に、同じ天羽槌稚神が祀られる天水分神社があります。この三社は関連があるのかもしれません。当社もかつては水分神社と称された時代もあったようです。

◎三つ目は「龍神」伝承。ご祭神に仏教の八大龍王が見え、大日堂では雨乞いが行われていたとか。現在は当地に川が見当たらないものの、往古には川があったので集落ができたと思われ、龍神が祀られていたのではないか。のうえであります。

以上から想像を働かせてみると、典型的な磐座(石室の巨石)、龍神、水神信仰の聖地であったのではないかという結論に。なお当社には八大龍王のうちの六体の神像が安置されています(二体は紛失か)。

※サイト「かむながらの道～天地悠久～」より抜粋 奈良県吉野郡大淀町大岩 428

■上宮寺跡（じょうぐうじ）

春日神社の南にあった聖徳太子ゆかりの寺であるが、現存しない。「日本書紀」によれば聖徳太子は用明天皇の池辺双槻宮の南の「上宮(かみつみや)」に住したので上宮廄戸豊聰耳太子ともいったが、「上宮」は近世の上ノ宮村と考えられ、「大和名所図会」に「上宮太子の住み給ひし所なり、其後寺となし、上宮寺と号す」とある。 奈良県桜井市上之宮

(参考)

■春日神社

上之宮遺跡のすぐ近く、集落の鎮守として静かにたたずんでいるのが、今回ご紹介する「春日神社」です。実はこの神社、聖徳太子に深く関わる「上宮寺跡」に隣接しており、歴史の重層を感じさせる貴重な場所となっています。

奈良県桜井市上之宮に鎮座する「春日神社」は、創建についてはっきりしませんが、単に春日大社から勧請されただけでなく、この地が持つ古い信仰の歴史を受け継いでいます。春日神社となる前は、地主神である「磐船大明神」と呼ばれ、饒速日命を祀っていたと伝えられています。これは大和の地が持つ、古い信仰の形です。その後、奈良の春日大社から春日四神(武甕槌命・経津主命・天児屋根命・比売神)を招き、合祀して「春日神社」となりました。現在は、武の神、知恵の神、安産の神など、春日四神が持つ多様なご利益を授かることができる神社となっています。

この神社の南側にある畠地一帯は、聖徳太子ゆかりの寺院「上宮寺の跡」と伝えられています。桜井市上之宮にある「上之宮遺跡」が発掘される以前は、この神社の場所こそが聖徳太子の「上宮」ではないかという説もありました。現在、有力説は上之宮遺跡に移りましたが、この周辺が古くから太子の宮殿の伝

承地であったことを示しています。

※サイト「みくるの森」より抜粋

●なんと聖徳太子ゆかりの上宮寺跡とつながった。本堂がどの位置にあったかは分からないが、おそらくこのライン上にあったはず。そしてなぜかここにも春日神社があった。さらに大岩神社は、サイト天地悠久さんによるとまさに出雲族の聖地と言える。この祭祀線も「有り」だと思う。

●湯殿山ご神体岩とつなげてみたが乗ってくる社寺は見つけられなかった。

●ということで、役の小角が大朝日岳と大沼浮島を開く前なのに祭祀線はつながっていた。大谷川（朝日町大谷）のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり大沼を見つけたと伝承されている。役の小角が開く以前から、別の宗教集団が存在していたということになる。きっと大沼のすぐ近くの集落「大暮山」に住む阿部一族（おそらく大和から物部に追われた出雲族皇子の大彦の子孫）が護っていたのではないだろうか。そんな同じ出雲族が信仰する全国の自然聖地を役の小角は山岳信仰で繋ぎ合わせて護ったのだと思う。晩年に伊豆大島に流されたのはそれらの裏工作が朝廷に知れたからではないだろうか。

●この時代に、すでに大沼の存在は知られていたのだと思う。大沼は追われた出雲族の聖地、すなわち鬼たちの聖地として鬼門に据えたのではないだろうか。

●とりあえず大朝日岳・大沼と京をつなぐ祭祀線がいつから始まったのかを優先に調べて、付随する祭祀線については、ぼちぼち追記していくことにしよう。次はその前の京「近江大津宮」天智天皇の祭祀線を探してみる。

(参考)

●出雲口伝によると、

山岳修験の開祖「役の小角」は、葛城出身で出雲族の血をひく。舒明天皇 6 年（634）に茅原に生まれた。その場所には吉祥草寺が建立されている。役の小角は、出雲の幸の神（さいのかみ）三神（クナト大神、幸姫、猿田彦）を三宝荒神に変えて護った。龍神も荒神と呼んだ。

役の小角が建てた笠山荒神は三輪山の奥にある鷲峯山の頂きに建つ三宝荒神社。全国の荒神社の源。鷲峯山は入山を禁止された神奈備山だった。笠山荒神の祭神は土祖神、奥津日子神、奥津比賣神。大神神社の神奈備山の三輪山頂上にある磐座は奥津磐座と呼ばれている。縄文の頃より出雲族が信仰した神は幸ノ神三神。クナト大神、幸姫大神、サルタヒコ大神。大神神社が三ツ鳥居なのは、幸ノ神三神だから。役の小角は、天孫族により隠された三輪山の幸ノ神を、出雲族として使命を持って修験道となり、神の姿を変えて後世に残す役目を果たした。出雲伝承では幸ノ神は奈良時代までは日本の中心の神だった。そして幸の神は天照大神に変えられた。